

千里地理通信

関西大学地理学研究会会報 第76号

Newsletter of Geographical Institution, Kansai University

Contents

Page 1

巻頭随想

赤い地形図

野間 晴雄

Page 2

同窓会通信

 卒業からまもなく
30年、まちづく
りへの道をふり返
る 榎田 基明

Page 3

卒業生だより

積み重ねる力

木場 隆弘

Page 4

学窓から

 ハノイでの地理学
研修の体験から
安田 えり

Page 5

実習調査報告

 南さつま市での実
習調査

萬野 晴彦

Page 6

秋の日帰り巡検

 香里園・枚方・樟
葉の住宅地を歩く
岸本 夕佳

Page 7~8

研究ノート

 小学校社会科にお
ける問題解決学習
による授業実践－
児童の学習過程の
質的改善に向けた
取り組みの事例報
告－ 岡田 良平

Page 9

院生・学部生の業 績

教室だより

会計報告

Page 10

随想

 「地理学の立場か
ら見た」千里キャ
ンパスの魅力

北田 晃司

Page 2~5

 卒業生・修了生か
らのひと言

巻頭随想

赤い地形図

野間 晴雄

いま国が作る日本の地図が大きく変わろうとしている。これまで国土地理院は、国土の測地事業と2.5万分1地形図など国土の基本となる地図の作成と刊行を一手に担ってきた。その基本理念と製作技術のコペルニクスの転換によって、地形図のもつ意味や使用法が大きく変わろうとしている。その過渡期である現在、私にはある種の違和感も去来する。それは地形図をもって山野や農村を歩くときではなく、市街化地域で新しい2.5万分1地形図（平成25年図式）を見るときだ。いまや地図は、スマホやタブレット、パソコン画面やカーナビで見ることが普通となり、紙の地図は存亡の危機にある。デジタル地図が普通の地図で、従来の地図は紙地図、印刷図と呼ばれる時代である。

山岡光治は地形図を「地表面の自然・高さ・人工物などを、三角点や水準点といった基準点に基づいて、縮尺に応じた統一的な基準で正確に表現したもの」と定義する（『地図はどのようにして作られるのか』ベレ出版、2015）。長年国土地理院で地図製作にかかわり、退官後にゼンリンにも勤めた叩き上げ技官が述べる言葉は重たい。地形図には民間地図にはない等高線が表記される。それに加えて、国の地形図では、建物や道路などすべての地物が、位置情報にもとづき地図上に正確に再現されることが大前提だ。しかし、2.5万分1のような中縮尺地形図で、その位置を正確に図上に示そうとすると、多くの情報が重なり合い識別が困難となる。道路が真幅では描けず、誇張や転位が行なわれる。建物は省略（総描もその一種）という職人技的編集作業が地図上にされてきた。

現在の地図の体系は、2011年から正式公開された「電子国土基本図」という巨大なサーバーで、地図情報、オルソ画像、地名情報の3つが一元管理されている。これが2.5万分1地形図に代わって国の基本図となった。都市計画区域は2500分の1、その他は2.5万分1の地図情報が基本となっている。これをWebブラウザで見る全体を「地理院地図」と呼ぶ。土地条件図や都市圏活断層地図、さらには年代の違う空中写真・衛星画像もここで閲覧でき、重ねて合せも可能だ。世界全図から17のスケール段階で地図をズームインして閲覧できる。ここまではgoogle地図と同じだが、大縮尺になると等高線が表示されることが最大の特色である。しかも建物の輪郭、位置、標高は数値で示される。これまで地域調査の際に市役所で購入してきた都市計画図の2500分の1レベルの地図情報が、居ながらにして全国得られるようになった意義は大きい。

その一方、2.5万分1の紙地形図を継承するのが「電子地形図25000」である。自分で閲覧からプリントアウトまでできる、これまで柁版の地形図では図名（図幅、図葉）で特定したが、これが新しい体系では図名を気にせずシームレスに一定範囲を切り出せる。道路・建物の色は選択肢から選べる仕組

で、陰影表現、土地利用、地物、地名も取捨選択して印刷でき、自分だけの2.5万分1地形図が得られる。「2.5万分1の地形図は実測図」は過去の話となり、編集図となった。データは大元の「電子国土基本図」が最新の情報に更新しているから、地図の調製年（以前は改測、更新と表記）は新しいが、過去の情報への遡及は難しくなった。

この「地理院地図」のネット公開で、5万分1の地形図は今後改訂せず、在庫を売り切れれば終わりとなった。この背景には、紙の地形図の売り上げの激減がある。最盛期の1981年には約910万枚あった売り上げが現在では65万枚まで落ちている。5万分1は10万枚しか売れてない。2.5万分1の売上げトップはずっと「穂高岳」図葉で、以下、槍ヶ岳、与瀬（相模原市緑区）、蓼科など関東登山ハイキング地が続く（田代博『地図がわかれば社会がわかる』新日本出版社、2016）。関西では「京都東北部」が北山連峰をひかえトップ10に入る常連だ。これらの地形図の山地部分は、緑系の陰影（多色）で見やすくなったと評判はいい。

問題は都市部である。市販の多色2.5万分1の地図は建物が赤、橙を主としており、見た目の印象は従来の墨、藍、褐の三色刷2.5万分1の地形図と大きく異なる。平成25年式図式（多色刷）は、白を除いて、①黒、灰、暗灰、②青、濃青、薄青、淡青、③赤、橙、薄橙、淡橙、褐、④緑、深緑の14色+陰影となり、理論上は101とおりの色が可能だ。問題はこの③の色相である。等高線や道路の褐色表記は変わらない。しかし従来墨で描かれた建物は、普通建物、無壁舎、その他の建物に③の色相が使われ、詳細なうえに微妙な配色のため、肉眼では区別できない。なんともシニアには目が痛くなる。多色刷地形図への順次更新は山間部・周縁部の更新が早かったが、今後は都市部で進む。紙地図を携行し、等高線や地物を読み、現地で照合する楽しみは萎えてしまう。全国に関わることだが、早急な改良と目にやさしい色への変更が望まれる。

当初は送電線や植生界も多色地形図で省略されようとしたが、有識者の意見で送電線は復活した。植生界は市販にはないがweb上で選択すれば表現される。山人の意見はいれられたが、地理教育、とりわけ初等・中等教育で人文地理を中心とする現場の声は反映されなかった。工場記号がなくなり、あの真っ赤な市街地を見せられると、まち歩きの楽しみは失せる。

その一方で、高低差、地形の凹凸で色分けした3Dデジタル地図作成が容易となり、出版社も飛びついた。都市内部のミクロでトリビアなディテールがもてはやされるが、立地と高さや歴史が安易に結びつけられる傾向も顕著だ。

近い将来、スケールを違えて地域の周辺を地形図で見渡し大局から判断する度量と冒険は、GPS万能の目的探索主義のなか片隅に追いやれていくのか。高校で「地理総合」が必修となり、地図教育の重視は嬉しい。この機会に、紙地図に書き込み現地で考えるため、中高生全員に自分の住む地域の多色刷地形図1枚を国の予算で供与する英断がほしい。それが紙地図の復権にもつながる。（本学教授）

学部生

池田航大

地理学専修で測量、現地調査、GISなどの学びを通して、普段歩いている地元の見方が変わったような気がします。地理学では仲間や先生に恵まれ、素晴らしい時間を過ごすことができました。ありがとうございました。

伊佐嘉真

大学に入ってから地理学に出会い、たくさんの経験をさせていただきました。多くの方の力を借り、充実した時間を過ごせました。ありがとうございました。

大西沙季

大好きな地理を素晴らしい人たちに囲まれながら学べて本当に幸せでした。地理学での学び・巡検は一生の財産です。3年間ありがとうございました。

小川諒也

地理を一から学ぶことや実習調査が大変でしたが、充実した時間を過ごせました。本当に地理学を選んでよかったと思います。ありがとうございました。

いま私は「まちづくり」の分野に身を置いている。といっても都市計画プランナーやまちづくりコーディネータという格好いいものではなく、住民の地道な活動を陰でお手伝いしている。大学には学部6年、大学院8年、研修生6年と在籍したが、ろくに研究もせずただらと道草ばかりしてきた。学ぶことは好きだが教わることが嫌いで、真面目な学生ではなかったが、道草の途中で出会った様々な人々が私を現在に導いてくれた。その大きなきっかけを与えていただいたのが河野通博先生であった。

一浪して関大に入学したのは1982年、法学部である。歴史、地理、民俗学か児童文学に興味があったが、法律の仕事をしていた父の勧めで法学部に入った。法学が面白くなかったわけではないが、バレーボールに明け暮れていた。そんななか出会ったのが河野先生である。総合コース科目「水資源論」は、瀬戸内海の漁業や中国の水問題など毎回興味深い講義で、公害や環境問題に関心があった私は一気に視野が広がる思いがした。初めて買った専門書が末尾至行先生の『水力開発＝利用の歴史地理』だったこと、高橋誠一先生の「人文地理」、「北欧の地域形成」というテーマに惹かれて履修した塚田秀雄先生の「地誌学」などにも影響を受け、卒業を前にして親に泣きつき文学部史学・地理学科地理学専攻に編入した。

4回生で河野ゼミ所属となり、京都・伏見の歴史的町並みを卒論のテーマにした。なぜだったのか定かでないが、公害や環境問題の延長でナショナル・トラストや歴史的環境・景観の保存に目が向くなかで読んだ木原啓吉著『歴史的環境－保存と再生』（岩波新書）に影響されたように思う。先生にテーマを伝えると「それならここへ行きなさい」と京都の都市計画事務所を紹介された。これがまちづくりへの扉を大きく開くことになった。研究対象から次第にまちづくりの住民運動に深く関わると同時に2年半ほどこの事務所に勤めることになり、都市計画

の実務やまちづくりの現場を学ぶことができた。この伏見のまちづくり運動を通じて、今は全国町並み保存連盟の活動にも関わっている。

また修士課程2年の時、まちづくり・町並みの調査に参加してはどうかと国土問題研究会を紹介された。この研究会は土木、地形・地質、河川などの専門家集団で、開発による環境破壊や災害・防災の問題などについて住民の委託を受けて調査・研究する組織である。社会科学系にはハードルが高かったが、後に理事を務めるまで深く関わることになった。

河野先生が何気なく、いやおそらく意図的に与えてくれたこれらが私を現在に導いてくれたのだと思う。ここからの展開が不思議な縁の連続で、研究者から住民まで出会い学んだ方々は数えきれない。特に強く影響を受けたのは（敬称略）、西山卯三、広原盛明、片方信也（建築・都市計画）、日比野正己、土居靖範（交通論）、北村隆一（交通工学）、伊東孝（土木史）、岡田知弘（地域経済学）、宮本憲一、植田和弘（環境経済学）、奥西一夫（地形災害）、中島晃（弁護士）、木村万平（住民運動家）、松永信也（視覚障害者）などだろうか。まちづくり・環境を起点に交通、経済、法律、福祉と広がり、専門外の交通と福祉を大学で教えることにもなってしまった。人生は本当にどう転ぶかわからない。

と、ここまで書いて紙面が尽きてしまい、私は何者なのかわからないまま（自分でもよくわからないのだが）終わらなければならない。ともかく、これからも道草ばかりしながら住民が主人公のまちづくりの黒子でありたいと思っている。

（えのきだ もとあき：企業組合 Fuu 空間計画代表理事、京都高齢者生活協同組合くらしコープ理事、1988年3月卒業）

Website : fuu-sd.com(事務所) ems-lab.org(個人)

*築百年の京町家の事務所見学や周辺のまち歩きなどご希望があればご連絡ください。

〈同窓会ニュース〉

第2回地理学研究会・同窓会幹事会を開催

2016年12月10日（土）13時から15時まで、地理学実習室で開催されました。出席者は以下のとおりです。

渡辺登（同窓会会長）、木庭元晴（研究会会長）

三好唯義、貝柄徹、茅田祐子、松本太、東出修一、堀内千加、矢野司郎、吉田雄介、田中優生、木場隆弘（以上役員）、松井幸一（事務局）、伊東理、野間晴雄（以上教員）。討議されたのは卒業生の名簿の整理と管理の必要性、財政状況、この2～3年以内に予定されている教員の退職に関わる行事などでした。

また今年度の寄付者は以下の通りです。厚く御礼申し上げますとともに、有効に活用させていただきます。

鈴記裕幸、渡邊登、榎田基明、大倉俊、大槻恵美、西岡尚也、伊東理、地理学教室

■ □ 卒業生だより □ ■

積み重ねる力

木場 隆弘

「地理学教室で学んだことは、これから自分の糧になるのだろうか。」そう思って大学を卒業したのも3年前、2014年3月のことです。地理学教室のみなさまにたいへんかわいがっていただき、大学を卒業することが寂しくとても名残惜しかったことを今でも昨日のことに思い出します。

現在私は、家電メーカーであるパナソニック株式会社の中の一組織である「パナソニック健康保険組合」で、パナソニックグループで勤務・退職の従業員が、健康保険証を使用して病院などにかかった際の医療費（年間で約550億円！）に関わる統計や医療費の使われ方に関する分析業務を担当して約3年が経ちました。

地理学と医療費・・・一見、まったく関わり合いのない分野なのでは？と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが。正直なところ、私も就職して間もないころからつい最近まではそう考えていました。

その中でも、大学での学びを活かしているなど最近になってやっと気付きはじめたことは、なんといってもデータや情報を自分の足で稼ぐ地道な姿勢だと考えています。

私は学部で卒業論文を作成する際、農耕神“タノカンサア”（※興味のある方は是非調べてみてください。その魅力にとりつかれるはずですよ）を主題にすえました。

“タノカンサア”とは南九州の田に散在する地蔵のようなものを指し、それらの分布・立地や像の特徴を掴むためには、タノカンサアを1体1体地道に自分の足を使って見て回り、時には地域住民の話を伺うことが、結論を見つけ出すために大きな役割を担っていました。しかしながら、それらを足で稼いで見聞きすることで、自分にとって最も深いやりがいや記憶を得ることができました。

やはりこの経験は、学問や研究の世界だけに限らず、社会人生活の中でも一発逆転はありえず、現在でも私の中に信念として根付いています。現在の業務においても、データを地道に積み重ねることが求められるため、大学での学びがまさに活かしているのだと強く思います。

一方で、世間ではよく、社会人としてのビジネススキルやエクセル・ワードでの技術を学生時代までに体得しておくようにと言われます。しかし、このような能力は社会に出てからでも、時には必要に駆られて自分のものにできません。

学生という自由な身分・時間があるうちにやりたいと思うことは目一杯吸収し、自身の揺るぎない考えを確立しながら、学生生活を楽しんでください。頑張れ地理学徒。

（こば たかひろ：パナソニック健康保険組合・2014年3月卒業）

木下雄太

授業、測量、巡検、旅行…毎日一緒に毎日笑いが絶えなかったです。地理学の仲良さは他にないと思っています。今後も年に1回は集まりましょう！

迫田雅彦

入学当初は地理学を学ぶとは考えもしませんでした。が、良き友人・先生のお陰で充実した4年間を過ごせました。周囲のすべての人に感謝です。

佐藤寛哲

地理学に入ってから3年間、仲良く、楽しく、たくさん勉強させてもらいました。特に、3回生の時の土佐市への実習調査はいちばん楽しかった思い出があります。お世話になりました。

力石亜海

教室の関係が密で友人や先生と楽しい大学生活を送ることができました。文句を垂れたこともあります。振り返るとこの専修で濃い時間を過ごしたと思います。皆大好き！

戸高幸星

地理学に入ってから、本当に充実した4年間を過ごすことができました。地理学での貴重な経験を忘れずに、鹿児島でも頑張っていきたいと思っています。

松尾 絢斗

私は3年前まで地理とは無関係の日々を送っていると思っていました。しかし、この世界は地理を中心に回っていることに気付かされました。大変お世話になりました。

森元 一登

地理学で過ごした時間は自分にとってたいへん貴重なものとなりました。地理学の先生方この3年間どうもありがとうございました。

森本 翔

私は、大学生生活に後悔しか残っていません。そんな私から在學生に1つ言いたいことがあります。何か自分から行動してみることです。私みたいにからっぽのまま卒業することのないようにファイト！地理学生！

山口 翼

地理学で過ごした時間は、私にとってかけがえのない貴重な時間でした。新社会人生活を迎えるに当たり、地理学で学んだことを糧にして一生懸命頑張りたいと考えています。

佐竹 秀人

ついに卒業することができました！6年間もの間勉強させていただきありがとうございました！地理学ゼミの先生方長い間ありがとうございました！！

学窓から

ハノイでの地理学研修の体験から

安田 えり

2016年9月6日から14日までの間、私は地理学教室の研修の一環として、ベトナムの首都であるハノイを訪問した。訪問したのは、野間先生と松井先生、TAの齋藤さん、大学院生1名と私を含めた学部生10名の大所帯であった。それまでろくに海外に行った経験を持たない私は、どのような場所であるのか見当がつかなかった。もちろん、現代ではTVや雑誌、ネットといったメディアから多くの情報を手に入れることができるが、実際どのような場所であるのか詳しいことは行って自分で見ないとわからないと考えていた。確かに不安もあったがそれ以上に期待していた。

実際に行ってみると、日本との違いに驚かされた。空港は想像以上にきれいで、道路は日本と共同で開発されている場所がありきちんと整備されていた。だが、道路を走るバイクの数が桁違いであった。このことはメディアを通して知っていたが自分の目で確かめるとその数に圧倒された。またバイクだけでなく自家用車もちらほらと走っており、齋藤さんいわく、ベトナムに留学していた時よりも増えたそうである。商店はイオンやロッテマートなどといった国外の企業も進出しているが、やはり日本と違って個人で営業しているような店が多いといった印象を抱いた。店だけでなく、かごを使いフルーツやドーナツのようなものを販売している人も町中において、昔ながらの文化が残っているのだと感じた。

今回の訪問の目的はハノイ大学の地理学教室

のスタッフの方と共同でハノイの旧市街地について調査することであった。この旧市街地には多くの通りと店が存在している。そして通りにはベトナム語で「銀通り」や「靴屋通り」「金物通り」といった同業者名がつけられている。調査は4つの班に分かれひとつの通りを選びその通りの店がどのようなものがあるのかを調べた。残念ながら、ベトナムの食事が合わず体調を崩した人がいて、調査人数が少なくなってしまった時もあった。ハノイ理科大学の学生さんと気温が上がらない午前中に街を歩いた。午後からはハノイ大学の部屋を使わせてもらい調査したことをまとめ、GISにデータを取り込む作業を行った。結果は、やはりどの通りも名の通り専門店がほとんどの割合を占めていた。だが、調査中も何度も観光客にすれ違うというように多く観光客がいることから観光案内所が数件あった。お土産屋では「ありがとう」と日本語を現地の人が話すなどニーズによって変化してきているところもあるが、まちなみ自体の景観は大きく変化していないと実感した。

この体験から、やはり実際に行くことは大切であることを知った。今までは英語が話せず外国にはいきたくないと思っていたが、意外と話したいことは通じることが分かり、そして実際に行くことで今その時の情報が自分の感覚で知ることができた。調査だけでなく、世界遺産のハロン湾の熱帯カルストが海に没した奇観にも行くことができ非常に楽しかった。

(やすだ えり：本学3回生)



ハノイ理科大学地理学教室での学生交流（2016年9月9日）

萬野 晴彦

関西大学文学部地理学・地域環境学専修では、地域調査の必修科目として3年次生の「地理学・地域環境学専修実習」、博士課程前期課程1年次の「地域調査研究」生に課している。春学期に調査内容の討議ならびに班編成を行い10月に本調査、翌年3月ごろに報告書を完成させる。完成した報告書は、お世話になった関係機関や個人・主要大学の地理学教室に配布している。調査報告書も今回で41号を数えることになる。

2016年度は10月3日から7日までの5日間、鹿児島県南さつま市を中心に総勢35名、6班編成（自然・防災、地域政策、水産業、農業、焼酎、集落・民俗）で共同調査を実施した。鹿児島空港に集合して宿舎のバスで加世田高橋の吹上浜ある南さつま交流センター「さんぱる」にむかった。ここに4泊して、毎日、車や自転車を利用して調査地にむかった。最終日の7日にはバスをチャーターし、笠沙半島をまわり野間池の笠沙恵比寿～坊津歴史資料センター輝津館～坊津のまちなみ見学～枕崎お魚センター（鰹井の昼食）～JR指宿枕崎線の最西端西大山駅～指宿～鹿児島中央駅（一次解散）～鹿児島空港（二次解散）のコースでまわった。3月には報告書が刊行される予定だ。

全体を通して振り返ると、各班とも同市役所職員をはじめ、地域政策班のことは鹿児島の地

方紙の南九州新聞にも取り上げられるなど、それぞれの関係施設や団体の協力もあってたいへんに充実した調査となった。南さつま市の生の空気や自然、人に触れながら得たこの経験は学部生にとって、これから卒業論文を作成するに当たって良い肥やしになることであろう。

最終日の打ち上げコンパ会場で食した鹿児島名産の「鳥刺し」で学部生の一部が食中毒になるハプニングにも見舞われた。事後処理に奔走することとなった先生方は、想定外の事態に本当に骨が折れたことだと思うだろう。

最後になり恐縮だが、改めて本調査に関わって頂いた関係者各位に深い感謝の意を申し上げます。

（まんの はるひこ：本学文学研究科・博士課程前期課程・地理学専攻1年次生）



南さつま市役所でのオリエンテーション
(2016年10月3日)

高坂百加

かなりの問題児でしたが、各先生のおかげで無事に卒業させてもらいました。5年間の大阪生活楽しかったです。

大学院生

酒井礼央

地理学に魅せられてから、5年が経ちました。大学院卒業後も、これまでの学びを活かして、未だ知らない「場所のチカラ」に出会い続けたいと思います。関大地理学教室の更なる発展を願っております。

清水紀宏

院の生活はあっという間でしたが、良い経験になりました。この貴重な2年間を与えてくれた両親、支えてくれた先生方、喜怒哀楽を共にした院生の仲間たちに感謝しています。

直 暁陽

院生の2年間に先生に出会えて、本当に良かったです。人生にも大変貴重な期間になりました。また、友達がいっぱい出来て、大学院や実習調査で充実した時間を過ごして、いい思い出になっています。

2016年度 地理学実習調査報告書 No.41 目次 『南さつま市の地理 地理学実習調査報告書 (41)』

はじめに

- I. 南さつま市の概観
- II. 南さつま市における自然災害と防災－急傾斜地と水害治水を例に－
- III. 南さつま市の地域政策－観光・交通・高齢化・市街地活性化の観点から－
- IV. 加世田の集落と民俗－川畑・小湊を事例に－
- V. 特色ある農業生産と経営
- VI. 笠沙町における漁業と民俗社会
- VII. 焼酎生産の現状と焼酎文化の風土
- VIII. 調査全体のまとめ

発行 関西大学地理学・地域環境学教室、2017年3月1日刊

岸本 夕佳

2016年10月16日(日)、京阪本線香里園駅に集合し、私たちは日帰り巡検を行いました。今回の巡検は、「京阪沿線の団地・郊外住宅地の比較と枚方市の歴史景観」をテーマに、枚方市・寝屋川市の住宅開発の移り変わりをメインに見ていきました。

まず初めに、集合場所である香里園についての説明が行われました。ここは、寝屋川市との境界地域ですが、1910年に香里遊園地が開業したことをきっかけに開発が進められ、1920年代になり、京阪電鉄による一戸建て住宅の開発が行われた場所です。駅前には昭和のレトロな雰囲気を全く感じず、むしろ高層ビルが建っているような近代的な雰囲気でした。少し困惑を感じましたが、駅周辺が再開発されたと聞き納得しました。

次に向かったのが、大阪聖母女学院小中高等学校です。この学校は、住宅開発にあたり、香里園に誘致された学校だそうです。私は学校誘致のことを初めて聞いたので、都市開発のためにこのようなことが行われるのだと思い、とても興味深かったです。

末広町からバスに乗り、香里団地へ向かいました。この団地は、1950年代に旧日本住宅公団が建設した初めての大規模団地で、学校やスーパーマーケット・市民センターなどもあり、イギリスにならってニュータウンと呼ばれましたが、その実は大阪市へのベットタウンでした。この団地で印象的だったのが、「スターハウス」という上から見ると星のようになっているアパートがたくさん並んでいたことです。よく見る四角形のアパートとは違い、特徴的な形をしたアパートが並んでいる姿は、見慣れない私にとっては面白かったのですが、老朽化が進んでおりこの姿が消えていくかもしれないと思うと、少し寂しさも感じました。

その後枚方公園駅へ向かい、もと京街道の船宿であった市立枚方宿鍵屋資料館へ行きました。この周辺は、今までの場所とは違って、江戸時代の細長い京街道の宿場まちなみが広がっていました。資料館では、淀川水運についての歴史などを知ることができました。2階からは、淀川の風景が広がっていました。

午後からは、渡来朝鮮人によって建立された百済寺跡へ向かいました。そこでは、地元の方が祭囃子の練習をしていらっしゃいました。百済寺での説明で、そこでフェスティバルなどが行われていると聞いて、古くからずっと地元の人に愛されているのだなと感じました。それから、平和ロードへ移動しました。この通りは禁野火薬庫への引き込み線跡で、歩道近くに花が植えられている

など、他の道と比べると緑に囲まれた場所だという印象を受けました。歩いているだけでは考えられないことでしたが、この周辺には、戦前、巨大な火薬庫があったそうです。今ではKOMATSUの工場となっている場所に戦時中には広大な火薬庫があると聞いて、当時の様子との違いに驚きました。その後、御殿山駅へ移動し、京阪電車に乗って樟葉駅へ行きました。樟葉駅は、香里園駅のように駅前開発がされていましたが、雰囲気は違っていました。駅の東側にはKUZUHA MALLがあり、周囲もとてもおしゃれな雰囲気で、近代的な街でした。今までの場所と違って、若い家族連れが多く見受けられるなど、生活に密着した街でした。

今回の巡検で、都市開発や住宅開発の歴史や流れを肌で感じる事ができ、実際に現地に行くことの大切さを改めて思い知らされました。また、文献やインターネットでの調査だけでは感じる事のできない発見もたくさんできました。先生方やOBの方々のお話も大変面白く、ためになるものばかりでした。ご協力して下さった皆様、また、参加して下さった皆様、本当にありがとうございました。(きしもと ゆか：本学2回生)



香里園戦前開発の住宅地での説明



旧枚方町の古民家改造レストラン「草々徒」での昼食

研究ノート

小学校社会科における問題解決学習による授業実践

- 児童の学習過程の質的改善に向けた取り組みの事例報告 -

岡田 良平

1. はじめに

現在の小学校教育では、「問題解決学習」が広く知られ、数々の実践やその報告がなされている。問題解決学習とは教師からの一方的な講義形式の授業形態ではなく、課題に対して児童が主体的に考え、発表や話し合いを通して学びあう授業形態である。その授業展開や方法にはさまざまなものがあり、その賛否もわかる。基本的には「読む、聞く、話す、書く、考える」の活動を1時限（45分間）に盛りこむ構成で、児童が主体的に学習に取り組み、対話的活動が充実することから達成感を感じやすいという点は共通している。1、2年生の社会科の内容は生活科に含まれるため、教科としての社会科は3年生から始まる。3年生では自身の校区や在住する市町村の様子や地図記号、4年生では自分の住む都道府県や地理的特徴、消防や警察、環境問題、5年生では世界の国々と日本の領土、産業、情報、環境防災、6年生では歴史的分野と公民的分野の学習をする。ここでは筆者がふだんの授業で実践している社会科の授業事例を報告する。

2. 学習指導要領の改訂とアクティブ・ラーニング

次期学習指導要領は、小学校は平成32年、中学校は平成33年が完全実施されることがある。その内容は、今後の変化の激しい社会で「正解のない問題」に対し、今ある知識や情報を活用して問題を解決する力や修正可能な納得解や最適解を作る力、すなわち「学びの質や深まり」を育てていくことにある。その思考の深化の手段としてアクティブ・ラーニングが位置づけられている。

アクティブ・ラーニングとは、児童が課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習である。最も重要

な点は、このアクティブ・ラーニングの視点は教師に習得・活用・探求の学習過程全体を見通した不断の授業改善を要請している点にある。その授業改善の指標として、①児童が問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているか、②他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める対話的な学びの過程が実現できているか、③子ども自身が見通しを持って積極的に取り組むとともに、学習活動をふり返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているかにある。

3. 問題解決学習による授業実践の一例

筆者の勤務する大阪の最南端にある岬町立深日小学校は、全校児童数108人（2016年）全学年1クラスの小規模校である。担任する5年生は20人（男子8人、女子12人）で男女とも仲はととも良く、何事にも積極的に取り組むことができるクラスである。以下、5年生の社会科（地理的分野）での問題解決学習実践を通して学習過程とその効果と課題について検討したい。

表1は、問題解決学習による社会科の授業展開を簡単に示したものである。授業開始後、①で本時の課題をつかみ、②の予想を立てることが非常に重要となる（資料1）。児童は、これまでの経験や知識から、想定される予想を示してくることもあれば、全くの見当違いやニアミスもある。それらを机間指導の間に把握し、児童に「おもしろい考えだから発表しよう」、「○○さんの次に発表してね」と助言し発表を促していく。児童も自分の予想を安心して発表し、教師も本時の課題に対する児童の理解度を知る手がかりとなる。

次に児童が予想したことを発表し、教師は黒板に板書

表1 問題解決学習による社会科授業の展開事例（指導略案）

時間	児童の学習活動	教師の支援・指導	評価基準
2分	本時の課題をつかむ①	本時の課題を出す	
3分	予想を書く②	机間指導し、児童に発表を促す	自分なりの予想を書けているかどうか
5分	予想を発表する	児童の意見を板書する	
15分	グループで教科書・資料集を中心に調べ、下線を引き、話し合い、内容をわかりやすくまとめ、わかったことをB4サイズの紙に書く③	教科書、資料集などで調べるページを指定し、簡潔に伝わりやすくまとめられるようにグループごとに指導・助言する	・簡潔にわかりやすくまとめられたかどうか ・話し合いができてきているかどうか④ ・自分たちの意見や考え、そこから出た疑問などが書けているかどうか
10分	グループごとに発表する（書画カメラやモニター等を使う）	・机間指導した結果、児童が発表しやすい展開を考えて発表の順番を決める ・各班の発表の要点を黒板にまとめる ・予想と合っていたかどうかを確認する	重複する内容は、割愛し、見やすくするなど相手に伝わりやすい発表になっているかどうか
10分	本時のまとめと、自分がわかったことを書いて提出する	机間指導する	自分のわかったことや気づいたことを書けているかどうか

する。この予想が正解かどうかを教科書や資料集などを使ってグループで調べていく(③)。調べ学習を充実させる際には、図書室の本やインターネットなどの活用も時には必要になる。ただ限られた時間内で調べ、まとめるためには、教科書や資料集をしっかりと活用し、必要な資料を取捨選択してまとめ、発表することを中心に構成している。その際、教師は教科書や資料集の調べるページを予め指定することで児童は調べやすくなるばかりでなく、教科書や資料を読み込むことができる。教科書や資料の読み込みは小学校段階ではどの教科でも非常に重要で、内容を深く理解していくことが④のグループでの話し合いが十分に持たれているかどうかの鍵となる。

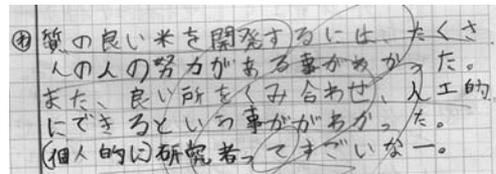
児童の中には、様々なタイプの児童がいる。お互いの得手・不得手をうまく補いながら教え合い、まとめ、発表するなどの協力・協働によって他者とつながりながら学習することが重要なポイントである。それが結果的に社会科嫌い、ひいては勉強嫌いを未然に防ぐ手立てではないかと考えている。

各グループの机間指導の間に発表の順番をこちらで指定することで、円滑な発表ができるように支援することも必要である。各グループが発表していく内容の要点をまとめ、予想と合っていたのか、またはずれていた場合はなぜそうなったのかを予想に立ち返って思考させることで深い学びにつなげている(写真1)。

学習のまとめとふり返りとしてのわかったことをノートに書いて提出して、1時間の授業が終わる。わかったことは、本時のまとめと重複することが多いが、新しいことを知った感動や驚きを書く児童を増やしていくことが「社会好き」を増やしていく最も重要な点ではないだろうか。児童のノートのわかったことであるが、たとえば米作りについて学習することへの喜びを感じられる(資料2)。

4. 問題解決学習の効果と課題

筆者は、現在、国語以外の教科で問題解決学習を進めており、特に算数、理科、社会ではほぼ同じ授業の流れになっている。こうした取り組みを進めるメリットとし



資料2 米作りの単元で児童Aのわかったこと



写真1 グループでの調べ学習
各グループが調べ学習をし、時間内でB4の紙1枚にまとめ、書画カメラなどを用いて発表する。

て、児童が主体的に授業に取り組むことができるということがあるのだが、それ以上に、授業の流れが同じであることで、次に自分が何をやるのかを予測して行動できるということの安心感や見通しを持って学習できることにある。それは、発表の仕方、ノートのとり方なども共通化することでより効果的になる。実際にクラスの児童でも勉強が苦手な児童ほど、その効果は大きく、成績の向上だけでなく、授業が楽しいと感じられるようになってきている。また、教師側も支援や指導が必要な児童への配慮をしやすくなるという側面もある。

一方のデメリットという点においては、予習をさせにくいことが挙げられる。与えられた問題をその学習時間で解決していくということは、事前に予習しておくことで解答を知ることにもなる。特に社会や理科など実験や調べ学習を行う教科は、結果を知っているとそのおもしろさが減少してしまうことも否めない。しかし、予習の学習効果は非常に大きいことから筆者は国語では、児童が簡単な予習をしてから授業に臨むように工夫している。

参考文献

大阪府教育センター 平成28年度校内研究担当者研修資料

[謝辞]

本稿の報告にあたって、平素より指導助言をいただいている西泰亨校長、岬町教育委員会を始め、授業改善のアドバイスをいただいた長根わかば教頭、出射美幸先生、神田彩乃先生、丸毛由利子先生、山内美智子さん、京川知子さん、道本浩美さん(深日小学校)、宮井恒典先生(岬中学校)にはこの場をお借りしてお礼申し上げたい。

(おかだ りょうへい:大阪府岬町立深日小学校教諭, 2009年3月博士課程後期課程修了)



資料1 児童のノート(問題と各自の予想)

ノートの左2マス分に線を引き、日付や教科書等のページを書いている。小学校ではノート指導が非常に重要である。

院生・学部生の業績 (2016年1月~12月)

【学会発表】

- 張 旭 2016. 北京城における宗教建築の変遷 (その2) - 清代宗教建築の復原と分布についての考察 -, 人文地理学会大会 (京都大学), 2016年10月13日.
- 張 立宇 2016. 都城における五行思想の運用 - 清代の北京八旗を事例として -, 人文地理学会大会 (京都大学), 2016年10月13日.
- 倉田英司*・野間晴雄 2016. 重要伝統的建造物群保存地区選定後における歴史的まちなみ景観の変容 - 三重県関宿 -, 人文地理学会 2016年大会 (京都大学), 2016年10月13日.
- 清水紀宏 2016. 1990年代末以降の大阪市中心地区における分譲マンションの開発動向, 関西大学史学・地理学会 2016年度大会 (関西大学), 2016年12月3日.
- 付 雪夢 2016. 八尾市高安地区における花き・植木栽培の成立と変容, 関西大学史学・地理学会 2016年度大会 (関西大学), 2016年12月3日.
- 萬野晴彦 2016. 富山県常願寺川流域における人間-環境システムとまなごしの変化 -, 関西大学史学・地理学会 2016年度大会 (関西大学), 2016年12月3日.
- 山岡真一郎 2016. 大都市の公共交通の発達過程と都市政策の比較 - 大阪・京都・名古屋を事例に -, 関西大学史学・地理学会 2016年度大会 (関西大学), 2016年12月3日.
- 齋藤鮎子 2016. 山宮御神幸道の復元に関する試論 - 富士山本宮浅間大社と山宮浅間神社を結ぶ道 -, 関西大学東西学術研究所 第13回研究例会 (比較信仰文化研究班), 2016年12月9日.

【博士学位論文】

- Abdul Malek. Alluvial Land Reclamation Process of Bangladesh with Special Reference to Historical Geography, Geo-politics and Environment since the Colonial Rule, [バングラデシュ沖積低地の開拓過程 - 英領期以降の歴史地理・地政学と環境 -] (主査 野間晴雄), 2016年9月.

教室だより

■M・D 大学院合同演習

2016年9月24日(土)13時30分から18時10分まで地理学・地域環境学実習室にて行われた。発表者は、計6名で、博士課程前期課程から卒業、山岡真一郎、萬野晴彦、付雪夢の4名、博士課程後期課程は張旭、張立宇の2名であった。

■地理学・地域環境学実習

2016年10月3日(月)から7日(金)にかけて、鹿児島県南さつま市で地理学・地域環境学実習調査を行った。指導教員は野間、松井。TA1名、院生4名、3回生28名の計35名で実施した。2017年3月に調査報告書『鹿児島県南さつま市の地理』が刊行され、全国の地理学教室やお世話になった関係者・関係機関に発送の予定。なお、最終日に市内の居酒屋で行なった打ち上げコンパで提供された鶏刺しで35名中、下痢、発熱、嘔吐などの異常を訴えた者が13名になった。帰宅後、医者を受診した学生は8名(いずれも3回生)にのぼった。検査の結果、カンピロバクターによる食中毒と判明し、大学と飲食業者が加入していた保険で処理をした。10日近く異常を訴える者もあったが、大事にはいならず全員快癒した。ご心配をおかけしたことお詫び申し上げます。

■秋の日帰り巡検

2016年10月26日(日)に秋の日帰り巡検が開催された。「京阪沿線の団地・郊外住宅地の比較と枚方市の歴史景観」をテーマとして、2回生が地理学・地域環境学基礎演習の一環として下記コースをまわりながら随所で説明を行った。コース:(集合)香里園駅(駅前開発)-大阪聖母女学院小中高校(戦前の京阪の住宅開発と学校誘致)-末広町=新香里(香里団地)-以楽公園前=枚方公園駅-淀川破堤地-枚方宿-鍵屋(船宿・資料館見学)-昼食(「草々徒」)-意賀美神社-枚方市駅(駅前開発)=百済寺跡史跡公園史跡-禁野火薬庫跡・KOMATSU工場-中宮団地-御殿山=(京阪)=樟葉駅-くずはローズタウン-樟葉駅(解散17時30分)OB・OGからは同窓会会長の渡辺登氏をはじめ松本太、田中優生、東出修一の4名にご参加いただき、教員2名、2回生・3回生・大学院生など、総勢45名の賑やかな巡検となった。

■第105回 地理学研究会例会(地理学セミナー)

2016年12月10日(土)15時から18時まで第1学舎A301教室にて、地理学セミナー(研究会)が開催された。M1大学院生により、10月に実施した南さつま市での実習調査

の中間報告ののち、中川夏姫(クモノスコオペレーション株式会社国際事業部)「迷ったらワクワクする方へ」、三好唯義(神戸市立小磯記念美術館)「関大地理教室と古地図」、伊東理(関西大学)「イギリス社会と小売商業-マーケット・近隣センター・チャリティショップ-」の発表があった。例会終了後は学内のレストラン「チルコロ」にて懇親会が開催され、現役生ならびに三好唯義、奥野一生、榎田基明、松本太、田中優生、矢野司郎さんらOB・OGの参加をいただき、親交を深める良い機会となった。

■教員の国外出張

野間晴彦:①2016年12月21日~26日、ベトナム クイニン大学での第9回ベトナム地理学会出席,②2017年1月4日~2017年1月7日、中国(南京市)、日本学術振興会科研費(基盤研究A,代表・小島泰雄)による南京大学でのセミナーと農家楽、近郊農村の見学・現地討論。③2017年2月18日~3月2日、トリニダードトバコ、スリナム、アメリカ合衆国、日本学術振興会科研費(挑戦的萌芽研究)によるサトウキビプランテーションの調査

■2月9日(木)に卒業論文の口頭試問が行われ、小川諒さんの「GISを用いた城下町の空間分析-津城下町を事例として-」が専修の最優秀論文として、卒業式の日に学部長表彰をうけることに決定した。また、2月15日(木)には修士論文の試問が尚文館で実施された。

■本年度の学部卒業生は14名、大学院博士前期課程の修了者は3名です。その論文題目は次号に掲載します。

▶▶▶▶ 平成28年度会計報告 ◀◀◀◀

(収入)	(円)	(支出)	(円)
会費(78名)	254,000	千里地理通信第74号印刷代	32,400
寄付金(1団体+7名)	96,240	千里地理通信第74号発送代	11,316
計	350,240	振込用紙印字サービス料	402
		役員への資料発送費	140
		切手代	9,692
		はがき代	1,640
(収支残高)	(円)	千里地理通信第75号印刷代	37,800
前年度繰越金	34,841	千里地理通信第75号発送代	12,090
収入-支出	244,460	文集発送代	300
計	279,301	計	105,780

筆者は2014年度から、関大のミューズキャンパスで教職科目の地理学概説と地誌学を担当させていただいている。しかし恥ずかしながら、関大の地理学・地域環境学教室の諸先生方の素晴らしい授業を拝聴させていただいたことは全くない。とはいえ千里キャンパスにはこれまでに結構足を運んだことがあり、しかもここに来るとなぜかいつも明るくアクティブな気持ちになれる。その理由としてはもちろん、関大の地理の先生方や大学院生たちも多数参加しておられる野外歴史地理学会の活動を通して（筆者もこの会の幹事である）、同会の会長でいらっしゃる野間晴雄先生をはじめ、地理学教室の関係者の皆様の御姿をいつも目にしていることが大きい。しかし今回はあえて、教室が立地している千里キャンパスそのものの魅力について、特に関大地理・地域環境学専修の学部生の皆さんを念頭に置いてアピールしてみようという次第である。

①語学力のブラッシュアップの場所として

千里キャンパスは季節を問わず、様々な検定試験の会場となっている。その中でも特に地理学と関係の深いのは語学の検定試験であろう。ちなみに筆者もこれまでフランス語、中国語、ドイツ語の3か国語の検定試験をここで受験したことがある（受験級は省略）。語学の検定試験は主に晩春と晩秋に行われるが、春の緑も秋の紅葉（特に銀杏）も、いつも私の背中を押してくれるように感じていた。もちろん、語学の勉強には終わりは無いし、流暢であることにこしたことはない。しかし語学と地理学は極めて深い関係にあり、たとえ初歩だけでも、地理学教室の授業で習う様々な国の言語を学ぶことには多に意義があるのではないだろうか。また、関大地理の関係者の中には大学院生の齋藤鮎子さん（ベトナム語）、現在、茨木市史編纂室に所属しておられる石坂澄子さん（ドイツ語）のようにプロレベルの実力をお持ちの方々もおられる。これらの大先輩のアドバイスを受けながら通い慣れたキャンパスで試験を受けられる、こんなぜいたくな話はないと言えよう。

②世界の料理を味わえる場所として

これは関大キャンパスよりも、むしろ阪急関大前駅から千里キャンパスまでの通りの話である。ここには中華料理やインド料理など、そばを通っただけでも食欲をそそられる香りに満ちた店が多い。その中でも特に筆者がおすすめたのは、関大の正門のすぐ横にある「ケーブコッド」という喫茶とレストランを兼ねたお店であ

る。いつも関大生でにぎわっており、自家製のケーキも充実しているが、サテ（マレーシアの串焼き）やカレーなどの一品料理のメニューも多い。筆者もしばしばこの店に立ち寄るが、その時は自分が博士論文などで扱った、いわゆる（形の上での）専門の国や地域ではなく、むしろあまりよく知らない国や地域の本を読むことが多い。時には気のついたことをメモすることもあり、小さな世界旅行を楽しんでいる間に日が暮れてしまったことも少なくない。

③フィールドワークの場所として

さらに関大の周辺には、近い所ではすぐ隣の千里山の住宅地やアサヒビールの吹田工場、少々遠い所では国立民族博物館など、地理学徒に多くの刺激を与えてくれる場所に事欠かない。特に千里山はロンドン近郊にあるレッチワースという町をモデルに開発が行われた。実際にはレッチワースは職住近接なのに対し、千里山は典型的な大阪のベッドタウンであるが、この「似て非なる」ものに触れるだけでも、地理学の面白さを十分に体験できよう。

おわりに

さて、そろそろ字数オーバーになりそうなので最後のまとめをさせていただこうと思う。これまで述べたように、関大の千里山キャンパスの周辺にはかくも魅力的な場所あるいは魅力的な機会がごろごろしている。特に地理学・地域環境学専修の学部生の皆さんは、ご自分が地理学の勉強をされる上では、日本でも稀な位、恵まれたキャンパスにいらっしゃることを自覚し、楽しく、かつ有意義な学生生活を過ごされることを切に望んでいる次第である。

（きただ こうじ：関西大学・高槻ミューズキャンパス非常勤講師）

千里地理通信 第76号

2017年3月18日 発行 (350部)

関西大学地理学研究会

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35

関西大学文学部地理学・地域環境学教室内
編集担当：野間晴雄 萬野晴彦

TEL：06-6368-1121(内線4890：大学院生室)

E-mail：kandaichiri@gmail.com

URL：http://www2.kansai-u.ac.jp/kugeoenv/

郵便振替：大阪00970-4-81149